

スウェーデンでのお産と子育て

(1) スウェーデンでの妊娠

海外出産・育児コンサルタント

Care the World 代表

ノーラ・コーリ

【はじめに】

次なる世代が国を支え、若いパワーによって国が栄えていくのはどこの国も同じです。先進国における最近の少子化は深刻さを増しているようです。スウェーデンは1980年代に出生率が下がり傾向になり、国を挙げて政策の見直しをしてきました。行政は率先して出生率を上げるための対策としてさまざまな子育て支援を実施しています。保育園の数を充実させ誰でも入れるようにし、妊娠から出産までの費用を全面的に支給し、父親でも母親でもとれる出産・育児休暇を480日に設定し、病児看護休暇を取れるようにし、16歳までは全児童に対して児童手当を支給し、子育て中の労働時間の短縮をするなど福祉国ならではの充実に取り組んでいます。特に両親が働きに出ても安心して子育てができるように保育環境と教育環境づくりに焦点が当てられてきました。それはこれから紹介する妊娠や出産の時から始まります。

【妊娠したら】

日本では妊娠したら直接、産婦人科医がいる病院かクリニックを訪れるのが一般的です。しかし、スウェーデンでは住んでいる地域管轄の医療センターを訪れます。医療センターには助産師がいます。まずはその助産師との診察予約を入れます。ただし、定期健診が始まるのは妊娠が安定期に少し入ってからです。

妊娠・出産の場合、スウェーデンの医療システムは、出産は病院、診察は地域医療センターというように役割が分かれています。一般的には病院は手術や入院検査などが主に行われるところで、紹介状があって初めてかかることができる医療機関です。それに対して医療センターは一般総合医、および外科、内科医、産婦人科医などの専門医が配置されています。医療センターで診てもらえる適応範囲はたいへん広く、例えば交通事故で整形外科にかかった場合、治療はもちろんのこ

と、その後のリハビリのためのプールも設置されていたり、松葉杖の貸出までセンターでフォローしてくれます。よほど重症で医療センターの範囲内で対処できない場合のみ、センターの担当医が指示する病院へ行って検査、治療、手術を受けます。医療センターは一般総合医、つまり健康管理や日常の体調不良などを診察する主治医がいるところです。すべての人がすべての症状のために病院へ出向くと大勢の患者に対応しきれなくなるので、それを防ぐため、病院は緊急および病院でしか対応できないケースのみを受け付けるようにしています。

医療センターは症状から判断して、より専門的な治療や精密検査が必要な場合に病院への紹介状を書きますので、患者をフィルタリングしていると言ってもよいでしょう。

そのため、なにかおかしい、あるいは予防のために受診する場合にはこの医療センターがすべての窓口となっています。ここに電話をして、症状を伝えると受付のほうでどの科を受診したらよいかを教えてくれて、予約を入れてくれます。自分でどの科を受診すべきだろうと推測をしなくて



すみます。予約を取る際には必ず名前、住所、身分証明書について聞かれます。

Photo by Landstinget

さて、妊娠をしたら、まずこの医療センターに行きます。この外観は病院というイメージはなく、たいてい大きな総合住宅の1階部分全フロアをセンターが占めています。MVC

(mödravårdscentralen) という看板が出ていますので、それが目印となります。地域によってはファミリーセンターという名称で、妊娠中の健診から子どもの健診までを管轄しているところもあります。ここでは出産についてのクラスや子育てに関するクラスなど大事に至らないための予防を含む教育も行われています。母子センターとも言えます。妊婦はここで妊娠反応検査から始まり、妊娠中の健診や主な検査、さらには出産準備のための情報を提供するクラスなどを助産師から受けることができます。しかし、出産はその医療センター管轄の病院となりますので、病院のチョイスは残念ながらほとんどありません。それでもこれらの病院は公立ではありますが、国が管轄しているので、設備面、衛生面、ドクターの質において特に問題はありません。運営においても国民の税金

があてがわれているので信用できます。ただし、税金があてがわれているということで無駄な検査は避け、最低限の処置、治療しか行わないのも事実です。

費用においては、ほとんどの市民が医療保険に加入しているため、健診を含む妊娠中にかかる医療費はほぼ無料です。それでも、ストックホルムのような大都市ではプライベートの開業医もいて、これらのクリニックを利用する場合は保険が効かないので自費となりますが、超音波検査などをもう少し多めに希望するならば受診してみるのもよいでしょう。

【 助産師の役割 】

イギリス、フィンランド、ノルウェー、オランダ、など福祉的ケアが進んでいる国の特徴だと思えますが、スウェーデンを含むこれらの国では妊娠中は助産師がメインに診ています。日本人としては産婦人科医に診てもらわなくて大丈夫だろうかと不安を抱くところですが、妊娠は病気ではないので、順調に妊娠中を過ごせば、病気を専門に診るドクターは必要はないという考えです。そのため、何か医学的に異常がある場合のみドクターの診察があります。順調であれば、妊娠中はもちろんのこと、お産、産後を通してドクターの診察はなかったという人もいます。

具体的には、まず、医療センターで担当の助産師を紹介されます。希望すれば2回目以降も同じ助産師に診てもらうことができます。助産師はチームを組んで診察を行っており、そこには産婦人科医も1人か2人含まれています。そのため、何か異常ではないかと疑問があれば、助産師はすぐに産婦人科医およびチームに意見を求めることができます。このように体制が整っているので、この体制を知ると現地の日本人の妊婦のみなさんも安心して助産師にかかっていました。

「助産師さんは私をとてリラックスさせてくれました。たとえば子宮の大きさもわかりやすいように『今はオレンジの大きさよ』とか『ドッジボールの大きさよ』というような表現を使ってくれました。不安なことはすべて助産師さんに聞きました。助産師さんは一人の患者さんに30~40分の時間をさいてくれますので、すべて納得がいくまで説明してくれます。そのため大方の不安はそこで解消されます。」(Kさん)

スウェーデンの助産師は広範囲に渡って産婦人科医並みの任務をこなします。例えば処方箋を書いたり、注射を打ったり、採血を行ったり、超音波診断もします。正常なお産であれば助産師が赤ちゃんを取り上げます。そのようなことから妊婦にとっては信頼できる強い味方とサポートを得

ることができて、特に女性の助産師は同性ということでも心強いという評判でした。なお、助産師は必ずしも白衣を着ていなくて、普通の洋服を着ている助産師もいます。

【 福祉サービス 】

福祉国家のスウェーデンは収入に対して支払う税金が高いことで有名ですが、その恩恵によって仕事と家庭との両立が図られています。子どもを産むことによって母体に無理な負担がかかったり、生活水準が下がったり、収入が減ったり、キャリアを諦めることをしないように国は対策をとっています。そのためにも、妊娠したら受けられるサービスを把握しておくことが大切です。

たとえば重いものを持ち上げたり、危険な薬品を扱う勤務環境であったり、母体に多大な影響を及ぼしそうな職場環境の人は妊娠2カ月から出産予定日の11日前まで、配置を変えてもらうことができます。その場合、社会保障制度により1日の収入の8割までが支給されます。出産準備のための講座、妊娠中の健診、出産、産後の健診はすべて無料です。また、有給の育児休暇は480日（1年と3カ月）です。その内の390日分は1日の収入の8割が支給されます。そして残り90日分に関してはすべての人達が共通して払われる一定額となります。仕事についていない人でも有給の育児休暇がもらえます。これは子どもが8歳になるまで支給資格がありますので、必ずしもいっぺんに通して取らなくてもよいようです。さらに子どもが8歳に達するまで就労時間を25%まで短縮することができます。

また、480日間ある有給の育児休暇のうち240日を母親と父親、それぞれで取れます。90日間は必ず母親だけ、あるいは父親だけという形で取るように推奨しています。このように政府としては父親の育児参加への機会を与えているのですが、やはり父親のほうは平均すると全育児休暇期間の4分の1しかとらず、仕事に戻ってしまうことが多いようです。

【 父親の育児参加 】

スウェーデンは男女平等が進んだ国だといわれています。それは女性の社会参加運動が反映され、男性の子育て参加への動きにも反映しました。出産や母乳を与えることは女性しかできませんが、家事や育児は男性でもできるはずと女性たちは声を大にしました。つまり女性だけに子育ての負担をかけないでほしいという声でもありました。結果、今日では、スウェーデンの街を歩いているとベビーカーを押す父親の姿が多いことに驚かれると思います。日本人の感覚からすると、働き

盛りの男性が真っ昼間から子どもと公園で他のパパたちと団欒している光景は奇異にうつりますが、大切な子育て期間でもあるので子どもとの時間を楽しんでいる父親も多くいます。

以前は多くの父親が「自分は母乳を与えることはできない」「父親としての役割は一家のために稼ぐこと」と言って、子育てを母親に任せてきました。しかし、男性の育児参加は女性が妊娠した段階から始まると伝えていきます。出産準備教室は2人揃って参加することも勧められています。教室では父親はサポートに立つ側としての重大な役割りを果たすと強調しています。教室では、以下のように父親の育児参加を奨励していました。

Photo by Nora Kohri



- 母親しか母乳は与えられなくても、父親は家事を手伝うことができる
- 母親は母乳を与えるので赤ちゃんとの絆が築きやすくなりますが、父親は赤ちゃんとの時間を多く過ごすことでその絆が結ばれる
- 父親は、母親が母乳が出ていないのではと心配している時に励ましてあげることができる。母乳育児の成功へのカギは父親の母乳育児に対する理解である。
- 母親のからだと心は産後激しい変化を通る。父親はそれを理解し、乗り越えられると励ましてあげられる。

最後には「2人がコミュニケーションを図りながら協力し合って家事や育児をこなすことは、子どもの将来の社会性をも育てます。ハッピーな子どもはハッピーな両親のもとに生まれるということです」というように締めくくっていました。このように父親は母乳を与えることができないから子育てに参加することができないという言い訳は通じないということでした。さらに赤ちゃんが産まれてからも2人の夫婦としての関係を忘れないように、たまには赤ちゃんを預けてデートをしたり、彼女がまだセックスの気分ではない時はスキンシップで関係を保つように伝えていました。日本ではとかく子どもが産まれるとパパ、ママという関係だけになりがちですが、スウェーデンでは男女としての関係も維持するようにと強調していました。 (次回へ続く)